

『宗湛日記』の世界

——神屋宗湛と茶の湯——

小 澤 富 夫

(一) 「茶会記」の成立とその意義

村田珠光に始まる佗び茶の世界は、茶趣における和漢の融合、茶室の改革と簡素化、そして「惣て茶の湯風体は禪」⁽¹⁾を精神的基底として成り立っている。この佗び茶の湯の隆盛は、「其の比、茶の湯せざるも人非人と等し。諸大名は云うに及はず、下々、殊に南都・京・堺町人に至る迄、茶の湯専一」⁽²⁾とする有様であった。天文年間、武野紹鷗の出現によって、茶の湯は一段と堺の町衆へ浸透するに至った。なかならず富力ある上層町人にとって、高価な名物道具の蒐集と飾り、亭主と客人による一座建立の寄合性は、積極的に享受されうる文化であった。応仁の乱以降、対明貿易・南蛮貿易を背景に著実な経済発展をとげた堺、その経済力を掌握した会合衆の活動は、耶蘇会士の報告によっても知ることができる。永禄四年(一五六一)この地を訪ねたガスベル・ビレラは、「甚だ広大にして大なる商人多数あり。此町はベニス市の如く執政官に依りて」⁽³⁾治められ、日本中でもっとも安全なる所と報告しており、廿年後のガスベル・クエリヨも堺について、「この市は日本全国で最も富み」、多数の富裕な商人が住み「自由市で大なる特権と自由を有し、

共和国の如き政治」⁽⁴⁾を行っている」と記している。動乱期にあって封建的な領主関係から解放された堺の都市は、管領細川晴元が在所とした後、天文年間、守護細川氏を圧した家宰三好一族の保護をえながら、会合衆による合議制のもとに「共和国の如き政治」が続いたのである。これらの会合衆は、いずれも屋号をもつ有力な問屋商人であり、貿易で巨利を得た豪商であった。今井宗及や津田宗達も、このような会合衆の代表的な存在である。宗及の父天王寺屋宗達が「台子の莊り一世樂しむ。名物卅種所持」⁽⁵⁾と茶書に名を留めたのも、天王寺屋の財力をしてはじめて可能であった。堺における富商の数寄者たちが、連日のごとく茶会を催していたことは、天文年間に成立する『松屋会記』^(一五六三年)、『天王寺屋会記』^(一五六七年)、『今井宗久茶湯日記抜書』^(一五六四年)によって知ることができる。なかでも『天王寺屋会記』は、津田宗達・宗及・宗凡三代の天文十七年(一五四八)より元和元年(一六一五)におよぶ茶会記であるが、その中心となるべき記録が『津田宗及茶湯日記』(自会記・他会記)である。『会記』では、宗及と叔父の宗閑・了雲・道吡、子の宗凡の天王寺屋一族が登場するが、彼らはいずれも当代有数の数寄者であった。宗及の前後廿一年間にわたる『自会記』

(自永祿九年十月)・『他会記』(自永祿八年九月)⑥に記載された茶会は、前者が約一〇九〇回、後者が約七七〇回の多くを数えるが、その推移を年代別に分類するとき、信長から秀吉に至る時代に生きる堺商人の活動と茶事の関連をも推考されう。(7)

他方、堺とともに栄えた筑前博多は、朝鮮・中国および摂津兵庫や和泉堺につながる海上交通路の拠点であった。天文二十年(一五五一)大内氏滅亡以後、大友・毛利両氏の抗争が続き、永祿八年(一五六五)大友義鎮(宗麟)による筑前平定から天正年間に至るまで幾度も戦災に見舞れたが、博多商人の経済活動は、天王寺屋を中心とする堺衆の茶会にも現われている。その代表が島井宗叱(のち宗室)であり、『宗湛日記』の筆者神屋宗湛である。⑧宗湛の茶会記(以下『日記』と略す)は、天正十四年(一五六六)十一月起筆、慶長十八年(一六一二)八月におよぶが、これは秀吉の九州島津平定、朝鮮遠征、さらに関ヶ原の戦いを経て徳川政権の成立という激動の時代にあたる。この政情の中で博多の豪商宗湛が、茶の湯を媒介に堺衆との交流、秀吉の政治的世界への接近、豊臣政権の博多商人の利用、あるいは宗湛と筑前領主との動向などを、簡潔な記載から読みとることができる。その意味で、茶の湯は佗び教寄の世界を志向する反面、商取引・情報交換・権力者への接近と顔合せなどの場でもあったと考えてよからう。茶会記は、たんなる客人・道具仕立・飾りの拝見といった茶事の覚書にとどまらず、茶の湯のことも実利的側面を注目することにより、博多・堺の有力商人の動向を考察する材料でもある。

『宗及自会記』(以下『自会記』と略す)永祿十二年(一五六九)

二月十一日振舞の記録は、次のような簡潔な記載である。

終日 上使衆

佐久間衛門 柴田 和田 坂井右進

森三左衛門 蜂屋 結城進齋 竹内下総 野間左吉

其外方々之衆

百人斗 折・歪之台 色々

この百人にもおよぶ天王寺屋での振舞は、何を意味しているのか。前年の永祿十一年十月、信長の二万貫の矢銭要求に対し、堺は「堀ヲホリ矢倉ヲアケ、事外用意イタシ候事無専、堺津中之道具女子共迄、大坂・平野へ落シ」⑨抵抗の構えを示したが、今井宗久をはじめとする和平派会合衆の説得によって、堺は信長に帰順する。しかし、翌十二年正月堺から出陣した三好三人衆⑩が、將軍義昭の御所本圀寺を攻め桂河で敗れた事件は、信長にとって堺が、三好勢力の策源地として制圧すべき存在であった。信長勢力に屈伏した堺衆は、この日天王寺屋に信長の上使衆を迎える。上席に信長の家臣佐久間右衛門尉信盛・柴田修理亮勝家・森三左衛門可成・蜂屋出羽守頼隆、義昭侍臣の和田伊賀守惟政・結城進齋、そして堺とは関係の深い松永久秀家臣の竹内下総守秀勝・河内若江の野間左吉共衛門康久の顔が並ぶ。この振舞は恐らく信長勢力と堺衆との和平会談であり、これによって、天王寺屋をはじめとする堺の商人は、信長と妥協・結合を保ちながら自己の商業圏を拡大していくのである。⑪

(二) 津田宗及の存在——信長から秀吉へ

『宗及茶湯日記』によれば、天文十八年(一五四九)以降の茶会

に「豊後」「はかた」と記された人物が数多く登場する。これら九州商人の来堺は、天王寺屋の商業活動が九州に及んでいることを示すが、「道叱、從豊後、昨日帰津にて候」(『自会記』永禄十年二月十日朝)、「道叱、田舎(豊後)へ下向之前日之振舞也」(同、天正九年三月晦日朝)などの覚書は、宗及の叔父道叱が豊後大友氏との交渉にあたっていたことを語るものである。そのご天正十四年(一五六〇)四月上落した大友宗麟を迎えるまで、豊後大友氏の家臣、商人などの来訪が続くが、⁴⁰その場合いづれも道叱が天王寺屋に同道するか、「從道叱客人」⁴¹であった。他方、博多商人の来訪も多く、『自会記』には宗作(井上宗悦の子、天文年間)、宗寿・紹悦・紹安(永禄・元亀年間)、宗寿(天正五年まで)、宗叱・宗伝・宗丹(宗湛)(天正八〜同十五年)などの名を認めることができる。彼らの中には「はかたや宗寿」(『自会記』元亀三年十二月十三日)という記載もあるので、博多屋の屋号をもつ堺在住の博多商人もいたのであろうか。ことに『宗湛日記』においても活躍する宗伝は、天王寺屋と博多商人との間に介する堺在住の商人である。『自会記』天正十二年九月廿三日昼の茶会は、宗伝を正客とするものであったが、「九州下向之花向会也」とあるので、宗伝の博多下向への饒別の茶事であろう。⁴²また、博多の宗叱は宗麟との関係が深いので、宗叱―道叱―宗麟の相互関係は、茶の湯を媒介にした堺―博多―豊後(大分)を結ぶ商業取引の構図でもある。すでにこの関係については、田中健夫・泉澄一両氏の指摘の通り、⁴³宗麟と家臣吉弘鎮信(宗伝)の宗叱宛書状には「道叱其方へ入魂候」(十月廿四日付)⁴⁴「道叱事可被罷下之由、雖被成御書候、未_レ上

着候哉。……叱下着候者、宗叱可有御上國之由是又本望候。」(九月十九日付)⁴⁵、これに続いて「今朝道叱へ宗佐同参候、茶給候、一入面白き不及言語候、彼墨跡拜見申候。」(十月晦日付)⁴⁶と、道叱の介在が多い。一方、宗麟は宗叱所持の名物道具植柴の肩衝を重ねて所望(十二月廿八日付)⁴⁷しており、宗叱と道叱の関係から道叱の父宗柏所持の雪の絵を、「何とか以才覚可被申調事肝要候」(二月二日付)⁴⁸と、その入手を依頼している。宗叱はこの道叱と宗伝を介して、天王寺屋の後だてにより堺商人から有力大名まで、その経済活動の範囲を拡大したのであった。『自会記』における宗叱の初見は、天正八年(一五八〇)八月廿五日朝会であるが、翌年十一月まで天王寺屋一族との同席の茶会が続ぎ、同十年(一五八二)正月廿五日には惟任日向守(明智光秀)の朝会に宗及と同道している。しかし、同年六月の本能寺の変以後、宗叱の姿は堺商人との茶会にみることはできない。その理由については明らかでないが、『島井家由緒書』⁴⁹『博多記』⁵⁰石田三成書状⁵¹から推察すると、堺との関係は宗湛と代り、対馬の宗氏とともに朝鮮交渉と、出兵にともなう経済活動に専従したと考えられる。⁵²

ところで、永禄十一年(一五六八)十月抗戦派の能登屋・臙脂屋などの堺会合衆が、信長の要求を拒絶する状態にあつたとき、今井宗久は「天下に隠れもなき名物松島の壺」と「紹鷗茄子」を献上⁵³している。宗久の巧みな信長への傾斜である。これに対して、天王寺屋は三好・松永勢力、石山本願寺下間氏との関係が持続されている。翌十二年四月京都鎮圧を終えると、信長は「金銀、米銭不足なき間此の上は、唐物天下の名物召し置かるべき」⁵⁴と、洛中洛外で

名物狩りを行った。この名物道具の強制的買上げは、元龜元年（一五七〇）四月堺でも実施される。「宗久道具ノ内、松嶋ノ壺、菓子ノ絵（趙昌等）召上ケラレ」⁶⁸「薬師院 一、小松島、油屋常祐 一、柑子口、松永弾正 一、鐘の絵」も「違儀なく進上」、⁶⁹天正五年（一五七七）三月には「化狄、天王寺屋の龍雲（了雲）所持のところを召し上げらる。開山の蓋置、今井宗久進上」⁷⁰と、数多くの名物道具が信長の所持となった。この茶器名物狩りは、人々の名物道具への関心を強め、これにもなつて茶の湯を政治的に利用する「茶の湯政道」（茶の湯御禁制）がおこなわれることになる。

天正元年（一五七三）十一月廿三日京都妙覚寺での信長の茶会に、宗及の名を初めて認める。招かれた堺衆は、塩屋宗悦・松江隆仙・宗及（翌廿四日付『宗久茶湯日記書抜』では、松井友閑・宗久・山上宗二）、茶堂は「我が茶の湯を取乱して、天下一出で坊主顔する」⁷¹「非作（創意工夫のない）」の人と、宗二が評価した不住庵梅雪であった。⁷²この茶会は、唐物名物をはじめとする信長所持の名器の誇示であり、町衆懐柔という政治的意図もあったものである。天正二年以後、信長と堺衆との茶会は急激に増加する。同年正月下旬、宗及は美濃岐阜に出向くが、そのとき「宗及拝見不仕御道具書立ラ上申セヨ」との御意あつて、特別に拝見を許され、そのご宗及の手前、「殿様御自身被下」振舞での御飯再進という厚遇であつた。⁷³翌三月は、堺衆のために京都相国寺での茶会、宗易・宗及・宗久の堺衆三大茶匠が同席し、他に道叱・宗甫・道設・宗訥・宗二の名もこれに続く。信長はこの堺衆を奈良へ同道し、勅許をえて正倉院御物の「天下無双の名香、蘭奢待」（東大寺と称す）を切り、

宗易・宗及にのみにその一包を与えている。⁷⁴翌天正三年十月、信長が加賀・越前の一向一揆を平定、本願寺光佐が和を請うと、堺衆はその戦勝見舞のため上落する。⁷⁵以後、宗及は毎年正月安土に参上、信長は宗及を親しく迎え、自からの案内で「御殿（安土城）不残見申候、天守をはじめ方々を拝見申候、其後、黄金見せさせられ候へん由被成 上意候て……黄金一万枚ほど見申候」、⁷⁶あるいは「御朱印被下拜黄金五十枚」⁷⁷拝領と、天王寺屋の存在は、いまや信長の政権下に不動の地位を確立したのであつた。天下統一に向う信長にとつても、宗及を代表とする堺の経済力の掌握は不可欠の条件であつた。天正六年（一五七八）九月卅日俄に信長は、前関白近衛前久・堺政所松井友閑（宮内法印）、佐久間右衛門尉信盛・滝川左近丞一益を御供衆に、細川信良・細川幽斎・佐久間不干斎・三好笑岩他、多数の「諸国衆」や家臣を引きつれ宗及邸に立ち寄つてゐる。そのご両者の関係は、堺政所松井友閑を介して同十年五月、家康の上洛まで継続的に『会記』にみられる。こうした状況において、「上様しやうかひ」⁷⁸となつた六月の本能寺の変は、天王寺屋にとつても大きな衝撃であつたようで、『自会記』では「七月九日羽柴殿上洛」⁷⁹に至る間、茶会記でありながら光秀と秀吉の動向が記載されている。

しかし、堺商人の時の流れへの対処は正確であつた。清洲会議以後の天下の情勢について、多聞院英俊は「大旨、ハシバガマ、ノ様也」⁸⁰とみているが、宗及と秀吉の交渉はすでに天正五年にはじまる。秀吉は前年七月安土城普請の功勞により、信長から「大軸の絵」（牧溪筆月の絵）⁸¹を拝領している。これは、茶の湯御政道の

世界に生きる武將にとって最高の名譽であった。以後、秀吉は信長以上に茶の湯に執心していく。同五年（一五七七）八月宗及とは入魂の間柄である松井友閑の案内で、はじめて宗及の口切茶会に招かれていた。⁴⁰この日、信長の御茶堂をつとめる宗及の手前で、秀吉も茶の湯者の仲間入りをしたのであった。同年十二月播磨上月城攻

略の功績に対して、乙御前釜を拝領している。⁴¹秀吉自身の茶会は、同六年（一五七八）十一月十五日朝、はじめて播州三木の付城で宗及を迎えて開かれた。この時、秀吉は三木城別所長治と対陣中である。信長拝領の釜と牧溪の大軸の拝見が、『他会記』に記されている。同八年（一五八〇）正月三木城を落とし上洛した秀吉は、二月近江長浜の居城に宗及・錢屋宗訥・伊藤安中斎・牧村長兵衛（のち兵部大輔政吉、利休七哲の一人）他を招き、信長拝領の四十石御茶を立てる。翌九年正月以来、安土・京都と信長の茶事に宗易と共に多事な宗及を、五月四日朝、松井友閑を伴ない秀吉が訪ねた。宗及の手前が終ると、塩屋宗悦・錢屋宗訥・小嶋屋道察が各々持参した名物道具を飾り、引続き書院の間で宗及が天王寺屋の名物道具を御目にかけてが、これは茶の湯に執心する秀吉にとって、宗及の演出は見事であった。翌月十二日、宗及は播州姫路城を訪ねる。この頃、博多の宗叱の天王寺屋来訪が『自会記』にみられる。そのご、因幡鳥取城を攻略、同九年（一五八一）十月落城、十二月安土城で信長に謁した秀吉は、「一身の覚悟を以て、一国平均ニ申しつけらるゝ事、武勇の名譽、前代未聞」と賞讃され、「御茶の湯道具、十二種御名物」を拝領した。⁴²この茶道具については、同月廿三日付「昨夢齋（宗久）・単丁齋（宗憲）宛書状」⁴³によると、竹

林筆雀絵・砧花入・朝倉肩衝・大覚寺天目・尼崎台・珠徳茶杓・鉄羽火箸・高麗茶碗の八色となっている。姫路から再度上洛する途上、同月廿七日撰津茨木にて拝領の道具開きの茶会を催す。茶堂は宗及がつとめる。天正十年（一五八二）正月に入ると、秀吉は毛利氏討伐のため西下、上洛は本能寺の変をまたねばならない。

光秀追討のため、六月十五日山崎に着陣した秀吉を、宗及は堀久太郎（秀政）に同道されて見舞い、「我等も上洛いたし候、首共見候」⁴⁴と、騒々しい京に在りながらも、六条本國寺陣所で小紫肩衝・豊後天目を拝見している。十月大徳寺で主君の葬儀を終えた秀吉は、翌月七日山城の山崎（妙喜庵か）において、宗易・宗及・宗久・宗二を迎えた茶会⁴⁵、引続き廿八日夜咄、同十一年（一五八三）閏正月五日、再び山崎で催しているが、茶趣は極めて宗易好みであった。こうした傾向は、天正十一年五月廿四日坂本での御会始にもみることができると。茶堂宗易によるこの茶会は、「御床（虚堂）墨跡、かふらなし、薄板ニ水斗、せめひも、小板ニ、手水間ニ紹鷗芋頭置合、教台、袋ニ天目、袋ニ、大覚寺天目、袋ニ、たこつほ水下、井戸茶碗、御茶甕入、なつめニ茶入候」と、佗び好みであった。越前北荘で柴田勝家を討ったのち、大坂城を築城、翌十二年（一五八四）移城した秀吉は、七月二日昼初の茶会を開いた。宗及は宗易と茶堂をつとめ、七日の七夕から七日間、「毎日御次間之八畳敷ニ茶湯させられ」といった熱心さであった。⁴⁶そのごも宗及邸には、秀吉をはじめ孫七郎（秀次）・織田有楽斎（信益）・前田利家・羽柴秀長・蒲生氏郷・安国寺惠瓊・松井友閑などの武將の来訪が続き、他方、秀吉の御茶堂の立場上、天正十二年から急速に茶会

がふえている。(註7年別資料参照)

秀吉は天正十一年に入ると、信長にならってか「道具揃え」の茶事を始めている。九月十六日の参会者の所持名物道具は、掛物だけでも「船子絵^{宗易}、布袋絵^{宗易}、帆帛絵^{道憲}、夜雨絵^{文周}、月の絵^{御物}、虚堂墨跡^{御物}、徳輝墨跡^{宗易}、定家ノ色紙^{道憲}」という豪華さであった。⁶⁴ 秀吉の好みに応えてか、十一月十日施薬院全宗(徳雲軒)の屋敷に「京中之道具取寄候、不残来候」と、宗及の手配で名物道具の展示会が催されている。後年、これらの名物道具が秀吉の権勢拡大にともなって献上されるべき対象となる。『会記』において百回を越える宗及自会は、天正十二年のみである。秀吉(四回)の他、多くの家臣、京・堺の商人との茶会がみられるが、この年の正月三日朝、大坂城の山里の数寄屋開きが行なわれた。⁶⁵ この山里の茶室については、『宗湛日記』(天正十五年二月廿五日付)によると二畳座敷で「床四尺五寸、カベ曆バリ、左ノスミニイロリ有、ソノ脇ニ道籠(洞庫)アリ」と記載されており、のち肥前名護屋の本陣に移築される。こうした茶事に追われる身でありながら、宗及は小牧長久手の役が始まるや、六月美濃墨俣に秀吉を見舞、宗二・宗無と茶会を催す。⁶⁶ いまや秀吉の在る所、宗及・宗易・宗久のいずれかの茶の湯者が近侍している。『宗二記』に「茶の湯の師なる覚悟は、茶の湯に三十年身を抛ち、我が茶の湯を嗜み、茶の湯の儀、坊主(茶坊主)をせまじきとて遍塞する目利をば、おのずから天下より呼び出す。」⁶⁷ との宗易の言葉があるが、彼らにとって秀吉の登場はまさにそうした実感をもったのであろう。

天正十三年(一五八五)正月、有馬へ湯治に出かける秀吉に宗易

・宗及は同行、三月には大徳寺塔頭総見院において大茶湯が開催される。これは京・堺が「茶湯仕衆、茶道具持ちて」参上し、十一箇所の仮茶屋に「方〳〵似相〳〵かり屏風已下にかこひ、其内にて茶湯面〳〵に仕」といった、後年の北野大茶会をおもわせる秀吉好みの茶会であった。⁶⁸ 宗易・宗及の案内による堺衆廿四・五人、京衆およそ五十人、秀吉の御馬廻衆・大名衆と多数の人びとが招かれた。三月根来寺雑賀衆を制圧し、政権の基礎を確立した秀吉は、七月十一日従一位関白に任ぜられる。十月七日、禁裏茶会を開き宗易が利休居士と号して茶事を後見した。宗及の『他会記』は、なぜかこの日をもって終っている。関白豊臣秀吉の出現は、翌八日付の『多聞院日記』では「様躰ハ秀吉新王ニナリ、秀長ハ又関白ニ成ル、歟」⁶⁹ という見方をしているが、これはやがて朝鮮遠征の計画が具体化される天正十九年(一五九一)太閤秀吉―関白秀次となって確かなものとなった。この年、天王寺屋の意向をうけてか宗湛が来堺している。翌天正十四年(一五八六)四月、道叱の案内で天王寺屋を訪ねた豊後大友宗麟は、秀吉に謁見し島津氏の領国侵入を訴え、出兵を要請している。この時期以後、宗及邸には石田治部少輔(三成)、大谷刑部少輔(吉継)両奉行の往来が続き、また、六月堺の政所は松井友閑に代り三成が就任する。秀吉の島津平定と朝鮮遠征の関連性については、田中健夫氏の指摘の通り、九州下向の延長として朝鮮征服が構想されていた。⁷⁰ 九月五日付耶蘇会師ルイス・フロイスの報告では、ヤソ会副管区長ガスパール・グエリコ一行に同道して秀吉に謁見した際、秀吉は自から城内を案内し「日本のことを処理して安定せしめた後、その兄弟美濃殿(秀長)にこれを譲り、

己は朝鮮及びシナを征服するために渡船する決心をした」と語り、代価を支払うから十分装備した帆船二隻と優良な乗組員の調達を依頼している。⁶⁴この話は秀吉の妄想ではなく、この時期すでに九州平定と外征とが密接不可分の関係で構想されていたと考えてよからう。毛利輝元宛の秀吉朱印状（天正十四年四月十日付）によれば、

「高麗御波事」が付記されており、⁶⁵豊臣氏奉行連署覚書にも「唐国まで成共可被仰付と被思召御存分之通ニ候条、嶋津背御意他処、幸之儀候間、堅可被仰付之儀、不浅候、各其分別專一要候事」（同年八月五日付）と、その意図が明示されている。⁶⁶世評ですら「高麗・南蛮・大唐マテモ可切入ト聞ヘタリ、抑大篇ノ企、前代未聞」⁶⁷のことであった。九州平定・朝鮮遠征の構想を実現するためには、筑前博多の商人の経済力と拠点としての博多の確保は絶対不可欠の条件であった。とすれば、奉行石田三成と天王寺屋宗及を基本線として、そこに博多商人を新たに組み込む必要性が生じてきたのである。『宗湛日記』が、天正十四年（一五六六）十一月廿三日の宗及老振舞をもって起筆されているのは注目されてよからう。宗湛の登場は、秀吉・宗及・宗湛、いゝかえれば豊臣政權・堺商人―博多商人の關係が成立する予告である。博多商人にとって、飛躍すべき時節の到来であった。

(三) 『宗湛日記』の世界——秀吉から三成へ

天正十四年（一五六六）十一月、秀吉の意向をうけて宗湛は上洛する。博多商人の経済力と拠点としての博多を翼下におさめるか否かは、秀吉にとっても重要な問題であった。宗湛の上洛は、天王寺

屋宗及を仲立ちとする博多商人宗湛の引廻しと考えてよからう。宗湛が滞在した四カ月間、催された茶会は百十六回を数える。茶会は、堺在住の博多屋宗伝と宗及によって、まず堺衆との顔合せが始まる。その間、十二月三日宗易・宗及と關係の深い大徳寺古溪宗陳のもとで得度している。明けて天正十五年（一五六七）正月二日昼、道叱邸に大和屋立左とその茶席にあるとき、大坂の宗及より「明日三日朝御城ニテ、関白様大名衆ニ大茶湯被成候、サ候へバ、宗湛事ヲ富田左近（知信）ドノ、関白様被成御取合候処ニ、サラバ明日御茶ヲ可被下之由仰出候ホドニ、早々御進物ヲ用意仕テ可被越」との書状がとどき、宗湛は急ぎ三成邸にいる宗及を訪ねる。三成・宗及―宗湛の顔合せである。島津平定の総奉行となった三成は、この夜宗湛を「奥ニヨビ入ラレ酒アリ、三方ノ上ニ白梅一枝置テ肴盃を置出」厚く持て成している。三日の秀吉主催のこの大茶会は、博多商人宗湛を供応するための色彩が強く、秀吉の応対も宗湛を含めその背後にある博多衆全体を意識したものであった。同時に、この茶会のと九州平定の陣立を大名衆に命じているので政治的意図をもつ茶会でもあった。当日の早朝、城の門外で宗及の紹介で宗易と初めて対面する。この茶会における秀吉の宗湛への厚遇ぶりは、すでに多く紹介されているので省略するが、⁶⁸「筑紫ノ坊主ドレゾ」と声をかけ、「ノコリノ者ハノケテ筑紫ノ坊主一人ニ能ミセヨ」と特別に宗湛だけの道具拜見、「ツクシノ坊主ニワ四十石ノ茶ヲ一服トツクリノマセヨヤ」との御意により宗易直々の手前があり、「ツクシノ坊主ニメシヤクワセヨ」と大名衆と同座で、しかも宗湛のみ三成の「御カヨイ」で食事をとっている。『日記』には「宗湛一人」

という語が生き／＼と記されているが、茶会は明らかに宗湛が主役であった。秀吉の心にくいまでの演出である。この日から、一介の博多衆宗湛は堺衆・諸大名にとつても、関白公認の商人として特別の存在となった。翌四日、宗及・宗凡と共に三成のもとへ「昨日御札」に参り、三成の手前をうけたのち、「カブキ茶」（茶合せ）をおこなっている。その宗湛は、堺衆をはじめ京の町衆、大和郡山の羽柴美濃守秀長、宗易などの茶会に、また宗及自会の席に名をつらねている。この間、宗及は正月十三日石田・大谷両奉行を招いているが、九州の陣で兵站奉行を担当する兩人と天王寺屋の茶事は、三月秀吉下向をひかえての打合せでもあろうか。二月廿五日朝、宗湛は再び大坂城山里の数寄屋に招かれる。正客は山岡対馬守景佐である。宗及の案内で二畳の座敷に入ると、亭主の秀吉がやがて現われ、立ちながら道具（床に玉鬚筆、遠寺晚鐘の一軸・施口平釜）を「ヨクミョヤ」と声をかけ、そのご振舞、手水の間には掛物を巻きおさめ「新田（肩衝）、袋ヌガセテ、四方盆ニスヘテ有、アマゴ（尼子）天目ニ道具仕入テ、水指手頭、真蓋、水覆カメノ蓋、鉄蓋置タイコノドウ（太鼓胴）」の仕立てであった。再び勝手より出て関白は、「ヨレガ手前ニテノマウカ」と言つて茶を点てたとある。去る正月の大茶会が「花紅葉」の世界とすれば、これは「浦の苔屋の秋の夕暮」⁶⁸ともいうべき静寂な佗び茶の湯であった。翌三月一日、秀吉は九州へ下向する。宗湛の帰国はやゝおくれて同月廿八日愛宕を下り、四月十五日唐津に帰着した。同十八日再び唐津を離れ、島津義久と対陣中の秀吉を見舞うため薩摩へ向つている。廿八日薩摩泉城で三成の取合せにより秀吉に御目見、進物を届け「金ノ天目」

で台子御茶湯をした。⁶⁹五月七日義久の降伏により、秀吉は六月三日筑前箱崎に入るが、その途上、肥後八代において書いた北政所宛自筆消息（五月廿九日付）では、七月十日ごろ大坂へ帰ることを述べ、これに続いて、

宍岐・対馬のくにまで、人質をいだし、出仕申候。又高麗の方まで、日本の大裏迄、出仕可申よし、早船をしたて、申つかわせ候。出仕不申候は、来年成敗可申よし、申つかわせ候。唐まで、手にいれ、我等一期のうちに、申つく可候。⁷⁰（原文を部分的に漢字に改めた）

と、高麗・唐国を「一期のうち」に領分とする意志のあることを記している。

さて、『日記』には「八日ニ、関白様御目ミエ仕候也、宗及老御取合」とあるから、宗及も茶頭として同道している。およそ二十数日間の博多逗留であるが、その間秀吉は小早川隆景を筑前領主に任ずるとともに、博多の復興を命ずる。秀吉の下した定書は「一、当津にをゐて諸問・諸座一切不可有之事。一、地子・諸役御免許之事、一、日本国津々浦々にをゐて、当津廻船、自然損儀雖有之、違乱妨不可有之事」の他、徹底した博多津の「商業保護振興政策」であった。⁷¹十日、その頃大友・竜造寺両氏の抗争のため廢墟と化した博多を巡検するため、箱崎の社頭前より「フスタト申候南蛮船」に「ハテル（パテレン）兩人・宗湛・其外小姓衆」を伴にして乗つて一巡している。この宗湛の覚書は、「一五八八年二月二十日付、有馬発」のフロイスの報告に詳しい。⁷²日本準管区長クエリヨは、関白に謁見して「聖堂及びカザ」の建設用地を請願すると、秀吉は

その請願を悉く認め、一行を「大なる親しみをもって」接し、「この出陣中になしたこと及び今後なすべきことを語り、日本のことを処理した後自ら大軍を率ゐてシナに渡り、同国を占領することに決した」と語り、そのごビセプロビンシャルの乗っているフスタ船に乗りパードレから歓迎されている。ところが、「同夜忽ち関白殿の心が変じ」伴天連追放令が発せられた。フロイスはその理由を秀吉の素性と性格に基づくものだ、次のように述べている。

この上もなく恩知らずであり……尋常ならぬ野心家であり、その野望が諸悪の根源となつて、彼をして残酷で嫉妬深く、不誠実な人、欺瞞家・虚言者・横着者たらしめたのである。彼は日々数々の不義・横暴をほしのままに、万人を驚愕せしめた。……悪魔がキリシタン宗団と教会に対する毒々しい攻撃を企てるにあたって、いかにこの人物（関白）がふさわしい道具であるかを見なしたかが容易に推察できる。⁶⁴

博多津の復興は、朝鮮・中国に渡る兵站基地として重要な問題であった。まず、町の指図を黒田孝高・石田三成に命じて書付させ、町割は滝川雄利・長束正家・小西行長他の奉行、下奉行三十名によって実施された。町割については『筑前国統風土記』（巻四、博多）⁶⁵に詳細に記されているが、宗湛と宗叱は共に「表口十三間に屋宅を給はり、永く丁役を除かれ」る特別の待遇をうけている。秀吉の博多（箱崎）滞在中におこなわれた茶会は、次の七回である。

六月十三日朝 宗及老御会、スキヤ（カヤブキ座敷）塩屋（塩釜のある小屋）ノテイニアリ。

十四日昼 関白様・施薬院全宗・小寺休夢齋（宗湛アト見）利休老御会、フカサテウ、カヤブキ、カベモ青カヤ、

宗湛・宗全・宗仁（博多年寄衆）紹安御会、ニテウ半、青松葉ニテカベヲシトミ、上苦フキ也、

同 宗湛・宗室

十九日朝 関白様御会、御教奇屋三畳敷、エンナシ、二枚障子ニ上ニアゲマド、六尺ノヲシ板有、

宗湛・宗室

廿五日朝 宗湛自会、二畳半、青カヤブキニ、カベ、ク、リノ戸マデ青カヤ也、

関白様・長岡玄旨（細川幽齋）、御カヨイ、休夢齋

廿六日朝 宗湛自会、

石田三成・全宗・九鬼嘉隆

日付不明 関白様御会、宗及ノ塩屋座敷

宗湛・斯波義銀・休夢齋（宗及御カヨイ）

道具仕立は省略したが、これら仮の茶屋はいずれも侘びた「カヤ」葺きの二畳半・三畳の小座敷であることは注意すべきであろう。天正二十年以後の『日記』では、この極小間に代つて長四畳という茶室が織田有楽・羽柴秀保・佐久間平斎などによって用いられており、⁶⁶天正十九年（一五九一）宗易・宗及の死によって、新しい茶風の動きをみる事ができる。こうした傾向は、天正十八年九月十

日昼、宗易の聚楽屋敷の茶事において、「茶ノ後ニ、又内ヨリセト茶ワン持出テ、台子ノ上ノ黒茶碗ニ取替ラル、」そして宗湛に「黒キニ茶タテ候事、上様御キライ候ホドニ」このように仕ると語る。宗易が好んで用いる黒茶碗を秀吉が嫌うのは、秀吉の好みが佗び茶を越えた新しい茶趣を求めたことにあるのであろうか。

さて、九州を平定した秀吉は七月十四日大坂に帰着、十月朔日北野松原において大茶会を催すことになる。⁶⁷「九州ヨリハ只宗湛一人」という秀吉の御朱印によつて、九月十七日博多を立つたが、天候不順のため聚楽第に到着したのは十月八日であった。⁶⁸当初この茶会は十日間の予定で開かれたが、佐々成政の新領肥後に国一揆勃発のため初日で中止となり、宗湛は間に合わなかつた。上洛した日の午後、聚楽第内の宗及座敷で宗及取合せによつて関白と対面、宗湛をみるや「カワイヤ、ソノク上リタルヨナ、ヤガテ茶ヲノマセウツヨ」と言葉をかけ、九州下向以来の再会を喜こんでいる。十二日秀吉の招きにより、聚楽第の平三畳座敷にて細川幽斎・古田織部と同席、手前は宗易。十四日昼、秀吉の命によつて三日間で建てられた二畳床無の教寄屋の座敷始に招かれる。客は宗及と宗湛のみという破格の招待である。秀吉が「是ヲツクシニテ人々ニ語り聞セ申候へ」と言うだけの自慢の茶席であった。この日の覚書には、教寄屋の奥の松原に別の茶屋を設け、長囲炬裏の一方には「クド(かまど)ニス、ケタル罐子」をおき、もう一方に「田葉豆腐ニツ立テ」、古板の上に藁円座を置き、その上に柿を二つ三カ所に配り、脇の壁に藁ぞうり二足をかけ、これを同朋衆一人が宗及・宗湛に一足五文で買わせ、円座を潜りのもとへ持寄り足袋をぬいでその上に置いて座

敷に入ったと詳細に記されている。この茶屋趣向の演出は、「ツクシノ者ニ一手シテミセヨ」という秀吉の御詫によるものであった。⁶⁹さらに廿一日、山里の教寄屋に席を移し宗及に同道する。その朝、島津家臣伊集院忠棟、細川幽斎を迎えて催された茶会の道具飾を拝見、やがて勝手より薄板を添えて長ソロリの花入れを持ち出した秀吉は、「博多ノ者ニ花ヲ入サセウヅ、イレズバ筑紫ニハヤルマイゾ」と宗湛に言い、宗及が宗湛に代つてお断りを申上げ、「サラバ入テミセソツヨ」と小車の花を一本さつと投げ入れた。秀吉の手前があつたのち、再び休夢斎を呼び一座で吸茶をおこなっている。この日「始ヨリ御機嫌能、雑談などいいかけられて、二畳の座敷に終日過したのであつた。⁷⁰この茶会以後『日記』には天正二十年(一五九二)五月廿八日名護屋での茶会まで秀吉との同席はない。宗湛上洛中の茶会にみられる秀吉の厚遇ぶりは、宗湛の背後にある博多商人全体を意識してのことであるが、フロイスの報告した秀吉像は、こうした秀吉の応対をみる限り適確である。

彼は不思議なばかりの計略と才知を働かせ、彼らをいとも寛大に取り扱い、その心を完全に把握するように心がけ、ある者には自由闊達に振舞つたり、慈悲と憐憫を示し、……またある者に対しては、特別に招待することによつて大いに親愛の情を披瀝したりした。⁷¹

このフロイスの指摘した最後の「特別に招待」こそ、茶会はもっとも有効な手段であつた。

ところで、天正十六年(一五八八)から十八年にかけての『日記』では、肥後一揆鎮圧のため下向した上方大名衆の招待、筑前領主

小早川隆景に関する覚書が多い。毛利輝元・秀包・勝信、安国寺恵瓊、浅野長政、福島正則、加藤清正、小西行長、立花宗茂、杉浦鎮信の他に、当時秀吉によって博多に流されていた古溪宗陳の名もみることができる。天正十五年六月、筑前領主となった隆景にとって、宗湛は博多衆を代表する豪商であるとともに、関白に直結する重要な存在であった。隆景の大名衆への茶事には、「日々茶道（茶堂）御相伴ニ宗湛罷出」ことも多く、他方、名嶋城の普請と博多の復興に宗湛は多忙な日々であった。宗湛が筑前で領内活動を続ける頃、上方では秀吉の小田原征伐、奥羽平定が完了したが、天正十八年（一五九〇）九月の上洛は、秀吉帰陣の時期と一致する。八日宗及を訪ね、十日昼聚茶第の利休老の茶会、利休はこの席にて黒茶碗で茶を立てることを「上様御キライ」と宗湛に語る。翌十月十一日朝、宗湛一人、千紹二の会に招かれている。「一疊平 上座ノスミツキニ、竹ノ筒ニ小車生テ、フロ 二重釜 友蓋イレッツリ棚ニ棗・茶碗置テ」という宗易好みの茶趣である。同日昼、輝元の茶会に隆景・安国寺恵瓊・毛利勝信・黒田孝高と同席、廿日朝大徳寺玉甫和尚のもとに古溪宗陳と同行、引続き昼、再び利休の席に宗湛一人迎えられる。黒茶碗にての手前、網をのけて「床ノ前投コロボンテ」の橋立の大壺の拝見、これまで宗湛の経験しなかった宗易の茶事であった。このとき宗易は、「肩衝ノ上ニ茶杓置候事、光（珠光）ノ仕出候、ナゲ頭巾ヨリ始ナリ」と茶事に関する雑談であった。

⁹⁴ 宗易切腹の四カ月前、宗湛にとっても最後の茶会である。十日朝、帰国する宗湛を宗及は招く。この日、本願寺新門跡教如上人を迎えての朝会があったが、宗湛はその跡見の茶会である。宗易と同

じくこの宗及も翌年この世を去った。

天正十九年（一五九一）正月から九月までの『日記』は、名嶋での隆景とその家臣との茶会が道具立の覚書もなく、簡潔に記されている。この間の記載で、二月五日宗湛自会客が、石田三成と大谷吉継・増田長盛であることは注意すべきであろう。三者はいずれも、九州の陣では兵站奉行を担当し、物資輸送の処理・兵糧米の徴収の關係から宗湛との交渉があり、しかも文禄の役の三奉行である。すでに一月廿二日秀長が没し、翌月廿八日利休切腹⁹⁵、かつて「公儀の事は秀長、内々の饑は宗易」とまで言われたこの二人の死は、秀吉にとっても転換であった。この年の九月、朝鮮遠征の実行期日を定め、諸大名にその準備を命じるとともに、十月肥前名護屋に築城と着実に計画は進展していた。天正二十年（一五九二）三月十三日付、隆景宛朱印状では総勢十五万八千七百人にのぼる陣立が記されているが、⁹⁶ この大軍派遣に必要な船・物資の調達に博多商人の力を用いる以外にはない。三奉行の博多下向は、この準備打合せと考えてよからう。同年十二月廿八日秀吉は関白職を秀次に譲り太閤となった。多聞院英俊が、天正十三年新王秀吉・関白秀長と予測した体制は、ここに太閤秀吉・関白秀次となって実現したのである。『日記』に天正十九年五月から十二月に至る間、記載がないのはおそらく三奉行依頼の諸準備に宗室と共に追われてのことであろう。

天正二十年（文禄元年、一五九二）正月五日、諸大名への朝鮮出兵が命ぜられると、増田・石田・大谷の三奉行は再び博多へ下向する。二月八日朝宗湛教奇では、茶事の記載はなくなつた三人の名が記

されている。大名衆の下向に先立ち、三奉行の最終打合せの茶会であろう。秀吉の名護屋下向にともない、諸大名に対する宗湛邸での振舞が多くなる。『日記』には、宇喜多秀家・徳川家康・羽柴秀保・前田利家・上杉景勝・斯波義銀、そして父宗及亡きあと秀吉の茶堂となった宗凡の名をみる事ができる。これ以後、宗湛は名護屋への往来が続く。朝鮮での戦況も順調で、五月六日付大政所宛自筆消息には「唐おも九月頃にはとり可申、九月の節句の御服は、唐の都にてうけとり可申候。……唐をとり候て、そもしさまの迎いを参上可申候」⁽⁵⁾と書き送っている。十六日には待望の京城陥落の吉報が届くと、秀吉は関白秀次に対して中国征服後における日本・朝鮮・中国の措置に関して次のように指示している。⁽⁶⁾まず高麗における太閤の城の御留守居には宮部法印(繼潤)を召寄ること、後陽成天皇を大唐の都北京へ明後年移し申す予定であること、大唐関白に秀次を任命し都周辺の百カ国を与えること、日本関白は大和中納言(羽柴秀保)か備前宰相(宇喜多秀家)を「覚悟次第」でいづれかをあてること、日本帝位には若宮(良仁親王)か八条殿(智仁親王)を、高麗國王には岐阜宰相(織田秀信)か備前宰相(前出)を就ける考であるが、そうなれば丹波中納言(羽柴秀勝)は九州に置くことになること、その他秀次の渡鮮に関する詳細な指示を「高麗國大明までも御手間不入被_レ仰付候。上下迷惑之儀少無之候」という見通に立って構想している。この構想が現実性をもちはじめた秀吉は、名護屋城内に移築した黄金の座敷と山里の教寄屋で大名衆を相手に茶事を催している。宗湛も名護屋での茶会に破格の扱いをうけて同席する。宗湛は、もはや堺衆天王寺屋をも越えた存在であ

った。五月廿八日、黄金の座敷で催された茶会は、一座六人ずつの七番、茶堂は住吉屋宗無である。宗湛は五番に加えられ、「織田信包(是ハ信長様ノ御舎兄也)・秋月種実」と共に「堀直政・大田原備前(是ハ関東衆也)・那須孫十郎(同前)」よりも上座を与えられている。『日記』では明らかではないが、おそらく一番には家康以下の有力大名衆の名があつたものと思われる。茶室はまさに「金ノ御座敷」の名に相応しく「柱ハ金ヲ延テ包ミ、敷モ鳴居モ同前也。壁ハ金ヲ長サ六尺ホド、広五寸ホドツ、ニ延テガンギニシトミ候。」「縁ノロニハ四枚ノ腰障子ニシテ、骨ト腰ノ板ハ金」、畳表は猩々皮(朱紅色)「ヘリニハ金ラン、中スミ(畳の床)ニハ越前綿(真綿)」であつた。しかも、茶道具は茶筌と茶巾を除いてはすべてが金である。⁽⁷⁾翌廿九日昼、博多衆柴田宗仁・的野宗列・日高宗曆を伴い御進物を山中山城守(長俊)の取次で進上したとき、秀吉は高麗からの吉報を受けて上機嫌で「博多ノ年寄ドモニ金ノ座敷ニテ茶ヲノマセヨ、宗湛召連ヨ」との仰付があつた。宗湛は前日に続き黄金の座敷で茶をいただいている。七月廿九日秀吉の上洛にともない、名護屋での茶事はとだえるが、やがて十月三十日朝、織田有楽斎を相伴に大名衆・小姓衆十人余り、他に休夢斎・宗凡を連れて博多の宗湛邸を訪ねている。秀吉は十月一日大坂を発し肥前に向つているので、その途次のことであろう。宗湛の茶室は二畳敷、吊り棚には黒ではなく高麗茶碗に道具仕入れ、棗と置合せてある。秀吉は機嫌よく宗湛や有楽と種々の雑談を交わしたが、床の軸を眺めたとき「此一軸ニ付テ床ヲ仕替ヘ」と亭主宗湛に教え、「此ヤウナル指南ハ、宗易モ宗及モ云テハキカセマシゾ」との御詫があつた。

宗易・宗及の茶風をつく宗湛へのこの指南は、茶人としての秀吉の一側面を物語るものである。帰途、住吉村河原まで供をした宗湛へ、銀子はいかほども貸してやるので「名護屋ニテモ商仕候へ」と言葉かけたとある。⁹¹十一月に入り再び名護屋に赴いた宗湛を、秀吉は浅野長政・織田有楽・蒲生氏郷ら八名と上段に同座させ、下の間の大名衆共々、振舞を催している。十七日朝、山里の教寄屋の座敷開き。これは「大名衆ニ御茶被進次第、十一月十四日ヨリ始テ十七日マデ」と付記されているので、宗湛はその最終日の茶会に招かれたことになる。この日、松浦隆信を正客、池田備中守・堀直政・船越景直と同席している。道具も日々改められ、十七日は小茄子・しぎ・初花・新田肩衝の名物道具であった。『日記』ではこの日付以後、秀吉の名護屋不在（文禄二年八月三日秀頼誕生）の文禄二年（一五九三）末まで、在陣中の大名衆との茶会が続いている。家康をはじめ前田利家・浅野長政・羽柴秀保・石田三成・長東正家・大谷吉継・寺沢広高・石田正澄（三成兄）・山中長俊、そしてその当時、前田家の客分の身である高山南坊（右近）など、およそ四十回の茶会が催された。

文禄三年（一五九四）から慶長元年（一五九六）に至る記載には、秀吉との茶会は全くない。文禄三年二月上洛した宗湛は、宗伝・道叱の堺衆、石田・長東両奉行の他は、すべて小早川隆景・山口玄蕃・毛利および小早川家臣との茶事である。ことに文禄三年四月二日以降、慶長二年正月廿四日までの期間、町衆との茶会はなく、隆景を中心とするものが多い。隆景との同席の茶会が、およそ三十回にもおよぶこと、文禄三年十二月一日の茶会から秀吉の側近山口玄蕃

宗永の存在が目につくこと、しかもこれらの茶会では道具仕立や拝見の覚書が少なく、記載内容が天正十五年堺衆との茶会録とは余りにも異っていることなど、宗湛の動向を注意しなければならぬ箇所が多い。大坂および名嶋におけるこの連続的な茶会は、「隆景様、金吾様（秀俊）御養子有テ、又輝元様御息女御取合アリテ、筑前國ヲユツリアタヘラレ候」の付記にすべて関係がある。文禄三年（一五九四）十一月十一日、秀俊（秀吉の正室おねの甥のち養子とな）を隆景の嗣子とすることが決定し、備後三原に下向するが、これは毛利一族にとっても重大な問題であった。おそらく、宗湛もこの秀俊の一件にかかわつたらしく、同年十一月十四日祝言のため宗室他の博多衆を同道して三原に向出ている。⁹²この十三歳の秀俊の後見役として秀吉がつけたのが山口玄蕃であった。玄蕃が初めて『日記』に登場するのが、十二月一日三原での「三カ日御祝儀」であるのはそのためである。翌四年（一五九五）十二月隆景の三原隠居にともない、秀俊は筑前新領主となった。この年、大坂では七月関白秀次が切腹、秀吉は秀頼への傾斜を強めていく。

慶長元年（一五九六）宗湛は再び上洛する。三月廿三日、北政所の振舞をうけ「白綾小袖、黒茶、重物」を拝領するが、これは筑前領主となった秀俊（北政所の甥、木下定男の五男）に対する博多衆への礼をかねての振舞であった。この年に記載された茶会は、すべて山口玄蕃を亭主とするもので政治的色彩の強い茶事である。十一月秀吉の意向をうけてか、山中山城守が博多に下向するが、その振舞にも博多津内の年寄衆をとめない宗湛は招かれている。翌二年宗湛は引続き上洛するが、正月廿三日付には「廿三日晚ヨリ山口玄蕃

ノ処ニヨビ置テ、馳走セラレソロ也。明日、御前ニテ筑前国ノ事御尋被成候へ、何ハナニトノ申上ソロテ給ソロヘト、玄蕃頼入候ト被申也。」とある。この一文は、兩者の關係が領主後見役と博多商人ではないことを示している。翌廿四日伏見城での秀吉御会に招かれる宗湛に、とかく領内政治で問題のある秀俊について、秀吉へは「何ハナニトテノ」と申上げてほしいと玄蕃が「頼入」るのであった。秀吉の質問に対する宗湛の返答次第で、筑前一国の生死をも左右することにもなりかねない。玄蕃にとつて、宗湛は一介の博多商人ではなく「内々の儀は宗易」に似た存在であった。玄蕃の依頼をうけた宗湛は、博多衆柴田宗仁・道哲を伴つて秀吉の茶会に参上する。「夜ノホノノノ時分」に茶室に入ると、五疊の座敷には玉砌筆遠寺晚鐘の一軸、内の柱には青磁の筒に薄色の茶花が生けてあった。秀吉の手前で濃茶を飲み、炭手前を拝見、そのご「博多ノモノドモニ城ノ内ミセヨ」の御説があり、青木法印に案内され、続いて別の数寄屋にて友阿弥の手前で薄茶をうけた。『日記』にみられる秀吉との最後の茶会である。伏見滞在中の宗湛は、わずかに納屋宗薫（宗久の子）・千紹安との茶事をもつが、宗易・宗及なきあと衆との往来は極めて少なくなっている。すでに、この伏見城での茶会の直前、秀吉は再度の朝鮮出兵を命じているので、博多衆への厚遇もこれと無關係であったとは考えられない。秀吉による慶長の役が開始されると、秀秋（秀俊）は外征軍大將となつて同年七月渡鮮するが、粗放の振舞ありと翌三年（一五九八）帰国を命ぜられた。秀吉は秀秋を越前北莊に移封し、筑前は蔵入地となり石田三成が新たに代官となつた。こうした情勢を反映してか、『日記』では

十一月八日、十五日、廿二日、廿三日と三成との茶会が多い。

しかし、慶長三年十一月一日より同四年三月廿五日に至る『日記』の記載には、注目すべき内容をもっている。慶長の役の開始された年の八月、秀吉が病没すると、その遺言に従い五大老五奉行による合議制の体制がとられたが、家康の台頭にもない三成との対立は、やがて関ヶ原の戦いまで発展することになる。こうした両勢力の対立分化の進展する慶長四年（一五九九）二月、宗湛は再び上洛する。二月二日昼秀俊の茶会には、浅野長政・九鬼嘉隆と、七日昼輝元の振舞、九日晚三成の振舞に宇喜多秀家・伊達政宗・小西行長と同席、この日は、家康が文禄四年八月、秀吉が定めた掟を破り伊達家との婚姻をすすめた一件が解決された四日後である。この夜、三成の兄正澄（石木工殿）も加わり「長崎ヨリノ到来」の酒や「ブタタウ（葡萄酒）」を飲み、「夜更テミナ御帰宅」とある。政宗が三成派の大名と同席しているのは、一件落着の挨拶と考えてよいのであろうか。十二日夜、再び大坂城の三成のもとへ島津義久・家久親子と宗湛、廿九日昼は宗湛一人、続いて輝元の茶会へ、三月一日朝大名衆四名と大谷吉継の会、その晩毛利勝信の振舞、三日朝安国寺惠瓊の茶会、閏三月九日昼秀秋のもとへ宗湛一人、十四日昼には長東正家の振舞にと、宗湛は多忙である。これら一連の茶会にみられる大名衆は、いずれも三成派であった。とすれば、秀吉没後の政情下において、宗湛はその博多商人としての生命を三成に賭たのではないであろうか。

(四) 宗湛の終焉

慶長四年三月廿五日、堺における道叱との茶会を最後に、同六年（一六〇一）十月まで『日記』は空白である。故意に削除されたものか、その理由は明らかでない。しかし、前述の慶長二年十二月一日から同三年十一月に至る空白と併せて考えると、秀吉の死と関ヶ原の戦という博多商人宗湛にとって、生死を決する重大な問題がからんでいることは確かである。『宗及茶湯日記』にみられた天王寺屋一族の動向が、『宗湛日記』にもうかがうことができる。関ヶ原の戦は、博多商人にとっても天下分け目の戦であった。二年半にわたる『日記』の空白は、慶長六年十月九日朝、新領主黒田長政の茶会から再び始まる。しかし、以後四九回におよぶ茶会は、長政・如水をはじめ黒田家臣のものである。慶長十八年（一六一三）八月廿日に至るこれらの茶会は、その記載内容も次第に簡潔化されている。ことに、同十二年（一六〇七）以後は、すべて自会のみであって天正年間の記載内容とは全く相違している。

家康による政権確立にともない、博多商人の活躍の場は失われ、かつて秀吉に厚遇された時代は過去のものとなった。天王寺屋を越えた政商としての地位も崩れ去り、新領主黒田長政の支配下に生きる一介の博多商人となる時代の到来である。茶の湯の世界においても、古田織部による新しい茶風が形成され、やがて柳営茶道の成立にともない茶格が重視されはじめる。町衆たちが大名衆と同席する茶事も不可能となった。慶長十一年（一六〇六）九月上落した宗湛は、織部を訪問するが「約束候へドモ大御所様廿一日朝江戸へ被成御下ニヨリテ」延期されている。^④すでに家康との取合をする大名衆もなく、宗湛は博多に下る。博多の豪商宗湛の終焉であった。以上の

ように、『宗及茶湯日記』から『宗湛日記』を、茶の湯の側面からではなく、信長から秀吉へ、さらに三成から家康へと展開する時代の流れの中で、宗及・宗湛という豪商たちの生きざまを茶会を通してみることはできるのであろうか。

- (1) 『山上宗二記』（『日本の茶書』(一)所収) 一四六頁。
 - (2) 同、一四二頁。
 - (3) 『耶蘇会士 日本通信』（『異国叢書』）上巻、「一五六一年八月十七日付」二六頁。
 - (4) 『イエズス会 日本年報』上巻、「一五八一年の日本年報」一〇九頁。
 - (5) 『山上宗二記』（前掲）、「茶湯者之伝」二四九頁。
 - (6) 『宗及茶湯日記自会記』（『茶道古典全集』第八卷所収）『同他会記』（同、第七卷所収）
- | 回数 | 自会 | 他会 |
|----|-----|----|
| 1 | 29 | 19 |
| 2 | 35 | 24 |
| 3 | 38 | 17 |
| 4 | 46 | 21 |
| 5 | 66 | 45 |
| 6 | 71 | 49 |
| 7 | 66 | 60 |
| 8 | 79 | 74 |
| 9 | 85 | 75 |
| 10 | 52 | 56 |
| 11 | 78 | 54 |
| 12 | 101 | 14 |
| 13 | 62 | 16 |
| 14 | 26 | ／ |
| 15 | 6 | ／ |
- (8) 宗叱については、田中健夫『島井宗室』参照。宗湛および『日記』に関しては、泉澄一『堺と博多』第四章、桑田忠親『宗湛日記―神谷宗湛の茶生活』（著作集、第九卷所収）参照。

- 『宗湛日記』（『茶道古典全集』第六卷所収）
- (9) 『他会記』永祿十二年正月十一日、一四八頁。
- (10) 三好日向守長逸・三好下野守政康・石成主税助友通、『自会記』永祿十一年二月廿六日振舞は、三好衆と宗及の關係を示す。
- (11) 信長と堺商人の關係については、泉澄一氏、前掲書、第二章六五頁以下を参照。
- (12) 例え、田村宗雪（永祿4・8・28）、くたミ宗行・林式部丞（永祿7・12・12）、小田辺宗雲（元龜2・7・17）、雲松軒（元龜3・12・7）、木花刑部（天正元・9・6）、雅楽介（天正元・12・7）、むなかつ宗察（天正5・7・23）。
- (13) 『自会記』元龜二年七月十七日朝。道叱については、泉澄一氏、前掲書、八十頁以下参照。
- (14) 泉澄一氏、前掲書、一八六頁以下参照。
- (15) 田中健夫氏、前掲書、三九頁以下。泉澄一氏、前掲書、一二七頁以下。
- (16) 『大日本史料』第十二編之二十一、四八一頁。本書の元和元年八月廿四日「筑前博多ノ商島井茂勝歿ス」以下に島井家文書を所収。『福岡県史資料』（第六輯）にも「島井文書及記録」を所収。
- (17) 同、四八六頁。
- (18) 同、四八三頁。
- (19) 同、四八二頁。
- (20) 同、四八〇頁。
- (21) 同、「近々朝鮮御征伐被思召立候付、宗室ニハ数度渡海仕候者之儀ニ付、地理等之儀、委敷御尋被仰付候事」（四七一頁）。
- (22) 『博多記』（『大日本史料』第十二編之二十一、所収）では、

- 秀吉の朝鮮征伐を諫めたため「商人故ニ其義不存と被仰、奥ニ御入被成候也、是よりして宗室は御前遠くなりけるとそ」（四七九頁以下）。
- (23) 前出、四九二頁。
- (24) 田中健夫氏、前掲書、一三九頁以下参照。
- (25) 『信長公記』（『戦国史料叢書』）八七頁。
- (26) 同、九五頁。
- (27) 『今井宗久茶湯書拔』（静嘉堂文庫所蔵本）三一頁。
- (28) 『信長公記』一〇二頁。
- (29) 同、二〇六頁。
- (30) 『山上宗二記』（『日本の茶書』（一）所収）二四一～二頁。
- (31) 『他会記』一九二頁。
- (32) 同、天正二年四月三日付、一九七頁。
- (33) 同、二四五頁。
- (34) 宗及は天正6・正・12、同7・正・11、同8・正・14、安土に出向いている。
- (35) 『他会記』二八一頁。
- (36) 『自会記』天正十年六月二日～七月九日付、三六四～五頁。
- (37) 『多聞院日記』（角川書店、六冊本）第三卷、二三三頁。
- (38) 『信長公記』一九六頁。
- (39) 『自会記』天正五年八月廿六日付、二五九頁。
- (40) 『信長公記』二一五頁。
- (41) 同、三四一頁。
- (42) 渡辺世祐『豊太閤の私生活』、二八九頁。
- (43) 『他会記』、三六四頁。
- (44) 同、三七〇頁。
- (45) 同、三七〇頁。

- 46) 同、三九四～六頁。
 47) 同、三九九～四〇〇頁。
 48) 桑田忠親『豊臣秀吉研究』、五〇八頁以下参照。
 49) 『他会記』、四〇四頁。
 50) 『山上宗二記』、二四二頁。
 51) 『他会記』、四〇九頁。
 52) 天正十三年十月八日条、前出、三卷四四九頁。
 53) 前掲書、一〇二頁参照。
 54) 『イエズス会、日本年報』(「異国叢書」上巻)一四一～一五一頁。
 55) 『大日本古文書』(「家わけ第八、毛利家文書之三二」)、二二八頁、同、二三〇頁。
 56) 『多聞院日記』、天正十五年三月一日条。
 57) 桑田忠親、前掲書、五一五頁以下。
 58) 『南方録』(『日本の茶書』(一)所収)、三九八頁。
 59) 『宗湛日記』、一二二頁。
 60) 桑田忠親、前掲書、五八六頁参照。
 61) 同、三三二頁参照。
 62) フロイス『日本史』(松田・川崎訳)第一巻、三〇六頁、
 『イエズス会、日本年報』下巻、二二〇頁。
 63) 同、三一七頁以下。
 64) 『福岡県史資料』(統第四輯地誌編一)所収、七八頁以下。
 65) 『宗湛日記』天正20・11・21、文禄2・正・17、同・正・19、
 文禄3・3・29。
 66) 『北野大茶湯之記』(『茶道古典全集』第六巻、『群書類従』
 第十九輯、所収)、桑田忠親、前掲書、五一九頁。
 67) 『宗湛日記』、一三三頁。
 68) 同、一三九頁。
 69) 同、一四一頁。
 70) フロイス『日本史』、第二巻、一九六頁。
 71) 『宗湛日記』、二五九頁。
 72) 『多聞院日記』天正十九年二月廿八日条には、「近年新儀ノ道具
 共用意シテ高値ニウル、ミス(亮僮)ノ頂上也トテ歎。」とある。
 73) 「小早川家文書、五〇一、豊臣秀吉朱印状」(『大日本古文
 書』家わけ第十一、小早川家文書之一、所収)
 74) 桑田忠親、前掲書、五七六頁。
 75) 『豊臣太閤御事書』(『群書類従』正廿一輯所収)、
 フロイスは「五月十八日付で、天下の君なる甥に宛てた太閤
 様の書状の訳文」(『日本史』第二巻、二四〇頁以下)と、全
 文を訳して報告している。特に、二四八頁以下の註を参照。
 76) 黄金の茶室に関しては、「その室は(解体して)多くの長い
 大函に入れ移動できるようになっている。」(前出『日本史』第
 一巻、二〇七頁)、『お湯殿の上の日記』天正十四年正月十六日
 条では「くはんはくこかねのすきのさしきもちて御まいり候
 て。小御所にて御めにかげらせられ候て。」(『統群書類従』補
 遺二『日記』の八所収、)四三三頁。
 77) 『宗湛日記』、一二七頁。
 78) 「小早川秀秋三原下向祝言日記」(『大日本古文書』家わけ
 第十一、小早川家文書之一、一四九頁以下)
 79) 『宗湛日記』、二五六頁。